

### 【自然を語る会報告】

\*日 時:12月15日(土) 10時~12時

\*場 所:飯田橋市民ボランティアセンター

\*参加者:13名

### 【ポール・ブルックス著 『レイチェル・カーソン』第20章「嵐」】

\*担 当:岩渕徹郎さん、柳澤征克さん

先月に引き続き、第20章「嵐」をとりあげた。

#### \*20章「嵐」概要

20章「嵐」は、『沈黙の春』が雑誌「New Yorker」に掲載されてから単行本として出版された頃の、全米に巻き起こったセンセーションとそれに対して、カーソンがどのように向き合ってきたかについて綴られている。(10月の自然を語る会報告より抜粋)

まず、初めに岩渕さんから農薬や種子についてお話をいただいた。

主な農薬について、カーソンの時代・その後に分けて、ホワイトボードに列記し、現在の農家の「農薬事情」「種事情」について次のようなわかりやすい説明があった。

・現在の「農薬事情」・・・ミツバチ大量死などの殺虫剤ネオニコチノイド、除草効果を謳うグルホサホート等々。(規制が緩い我が日本国)。

残念ながら、農薬企業はグローバル巨大企業となり栄え(例:バイエル〈独〉がモンサント〈米〉を合併)、自社の農薬と共存する種子を販売し、その上、農家の「糧」つまり「自家採種」の力を奪った。

・農家の「種事情」・・・農業は企業化され、遺伝子組み換えなど種子を人工的に操作し、生産性の上がる(農薬に強い)種子を作り上げた。その種子(F1種子)で育った農産物(穀物など)は、その一世代に限って有効である。従って、その作物から採種出来ない

ので、毎年種を同じ種子会社から購入しなければならなくなる。  
農薬企業=種子企業。主要な穀物、農産物が世界的に、独占(寡占)支配されつつあることなど。

その後に柳澤さんから先月の資料を使ったお話と、参加者で20章後半を輪読し、各自思うところを語り合いながら進められた。

『沈黙の春』出版後、化学薬品会社等からの「非難の嵐」と同時に、「沈黙の春の本質に気づいていた人達」の意見、おびただしい数の手紙など「称賛の嵐」もあり、「この手紙だけでも書いた価値があった」とカーソンが語ったという少年からの一文も紹介されてい

た。当時の米国大統領・ケネディは大統領科学諮問委員会の科学技術特別委員会で農薬委員会を設置、委員会の報告により、『沈黙の春』が果たした功績を評価し、カーソンの立場を公式に認めるに至った。

柳澤さんの参考資料には、豊かな髪のカートソンが『沈黙の春』出版後にテレビ出演のためのインタビューを受けている写真があったが、すでに病魔に冒されており、薬の副作用のため鬘を使用して臨んだようだ。

また、『沈黙の春』の賛否両論の嵐の中でもカーソンは常に冷静に事態をとらえており、論駁・言及すべき点は根拠を明らかにし、科学者としての態度を貫いていた。伝えなければという意思の強さを感じた。

これらの内容について、柳澤さんの資料は写真やレイアウトも含め、大変わかりやすく整理されていて、この章の理解にとっても助かった。

自然を語る会の最後は、農薬の話から身近な「野菜」について広がり、有機栽培野菜は価格が高い、カット野菜は無駄がなく価格が安定している、泥付野菜や虫食いを敬遠する消費者側の考え方など、普段の生活を振り返る話題となった。

また、今回は九州から来られた方もいらっしや、普段とは違った新鮮な雰囲気な中での会となった。

(岩淵・勝山 記)

